

ほっといて下さい10

〜従魔とチートライフ楽しみたい!〜

クラウド隊長

サウス国の部隊長。
実直な性格で、国のために
必死に働いている。

エヴァ

海の町で出会った
ハイエルフの薬師。
かつて転生者の雄一郎という
恋人がいた。

ピース王子

サウス国の王子様。
ミヅキの新しい友人。
病の影響で目が見えなく
なっている。

CHARACTERS

登場人物紹介

シルバ

魔獣フェンリル。
ミヅキの従魔で
高度な魔法を自在に操る。
ミヅキが何よりも大事。

ジノク

鳳凰の雛。
ミヅキに命を救われ、
従魔の契約を結ぶ。

コハク

魔獣ケイパーフォックス。
田んぼでミヅキと出会い、
従魔の契約を結ぶ。

ミヅキ

事故で命を落とし、幼女として
転生してしまった。
異世界ではトラブルに
巻き込まれがち。
周囲が過保護すぎるのが悩み。

ムーちゃん

珍しい色をしたスライム。
どこかに主人がいるようだが、
ミヅキについてきている。

プロローグ

私ミヅキは前世で事故に遭い、命を落とした。

しかし、目覚めると幼女の姿となり、この世界に転生していた。

最初は体や年齢、世界の文化の違いに戸惑うこともあったけど、今では従魔のシルバ達や、何かと世話を焼いてくれるベイカーさんやセバスさん達のおかげで、すっかりこの世界を楽しんでいた。私はこの世界で冒険者になり、のんびり楽しく過ごせればいいと思っていたが、神様のいたずらか私の周りではよく問題が起こり、みんなからトラブルメーカーとして扱われていた。

街を歩けば誘拐され、王都に行けば誘拐され、ドラゴンや訳ありな魔物を従魔にするなど、保護者代わりのベイカーさん達の苦勞も絶えないようだ。

今回も、海に遊びに行ったら人魚のアクアと出会い、海の国のトラブルをみんなの力を借りて解決した。

海の国のみんなと別れ、久しぶりの地上に出たと思ったら……またまたトラブルの予感。

今度はどんな問題に巻き込まれるのか、私はまだ知る由もなかった。

「わあ！ 久しぶりの陸上！」

私達は海に入った時の島に戻ってきた。

送ってくれたリバイアサンや海熊が、海からひよっこりと顔をのぞかせる。

【リバイアサンありがとう、海熊さん達もね】

頭を撫でてやると、気持ちよさそうに目を細めた。

【また、会いに行く】

【うん！ 美味しいもの作って待ってるよ】

リバイアサンは言葉少なく、海へと帰っていった。

みんなの姿が見えなくなるまでしゃがんで海の底を見つめていると、自然とため息が漏れた。

隣にベイカーさんが座る。

「なんか一気に寂しくなったな」

「ねえ、ベイカーさん。海の国のみんなとしばらく会えないと思うと、寂しくなっちゃうね」

ベイカーさんが私の頭にそっと手をのせた。

「帰ればみんなが待ってるぞ。コジローにユキ、ムサシ。王都に行けば部隊長のみんなや、里のみんなもいる。寂しさなんて一気になくなるさ」

「そうですね。さあ、帰りましょう」

セバスさんも隣に立って、優しい瞳で見下ろす。

少し寂しさが紛れ、私は元氣よく立ち上がった。

【そうだね、みんな帰ろう！】

私はみんなを運ぶ用の籠を出して、プルシアに渡す。

「その前に、私とベイカーさんで海の町へ報告に行ってきます。ミツキさんはデボットさん達と、町の近くで待っていて下さいね」

「はい！」

「護衛は、シルバさん達がいれば大丈夫ですよね？」

【ああ！ 任せておけ】

【ミツキのことは、僕らがちゃんと守るよ】

シルバ達が得意げに吠える。

「ではプルシアさん、町の近くの森に向かって下さい」

【わかった】

プルシアのおかげであっという間に町に近づくが、何か様子がおかしい。

【なんか人が多いな、大丈夫か？】

プルシアが下を見ながら呟いた。

【えっ？】

私も籠の端に駆け寄り、下をのぞき込む。

「どうした？」

みんなも私の行動に倣って下をのぞき込んだ。

「げっ！」

「これは、まずいですね」

ベイカーさんとセバスさんの顔が曇る。

「あれは、サウス国の紋章ですね」

セバスさんが、兵士が掲げている旗を指さした。

「もしかして、サウス国の王都の部隊が到着したのか？」

「そうかもしれないね」

「どうする？」

ベイカーさんがセバスさんに問いかけた。

「関わり合いたくないところですが……。我々が説明しなければ、海の国がサウス国に誤解されたままになってしまいます。ジョルダン王から書状も預かっていますし」

セバスさんがどうしたものかと唸っている。

「じゃあみんなで行く？」

セバスさんを見上げて提案してみた。

「三」駄目だ！（です）「三」

久しぶりに、みなさん息ひっきりで反対してきた。

「私とベイカーさんで、さっさと書状を渡して帰りましょう」

「了解。俺は余計なことには言わないように黙ってる」

ベイカーさんが頷くとセバスさんが準備を始めた。

「ブルシアさん達はこのままもう少し離れた場所に降りて下さい」

「セバスさん達は？」

「私達はここで降ります」

そう言うとセバスさんとベイカーさんは、躊躇なく空の上の籠から飛び降りた。

「あっ！」

下をのぞき込むと、二人は砂をまきあげて着地し、スタスタと歩き出していた。

「すげえ」

デボットさんは想像したのかブルツと震えている。

私はほとんど離れて行くセバスさんとベイカーさんの背中を見つめていた。

「一緒に行きたかったなあ」

安心できる二人が行ってしまい、また寂しい気持ちになっていた。



「うわっ、門の前にもわんさかいるぞ」

俺とセバスさんが海の町の門まで来ると、サウス国の兵士が群がっていた。思わず眉をひそめる。

「ブルシアさんの姿を見られたのでしょう。警戒されると面倒ですね」

隣のセバスさんも面倒臭そうな顔をする。

「止まれ！」

門に着くと案の定、兵士に道をふさがれた。

「この町に何の用だ！」

あからさまな警戒に対して、セバスさんは友好的に返す。

「この町の町長さんに頼まれて、海の国に行っていた者です。町長さんにお目通り願います」

セバスさんが礼儀正しく頭を下げたので、俺も続いて頭を下げた。

「もしかしてあなた達がA級冒険者の方でしょうか？」

兵士達が少し警戒を解いた。

「こちらでお待ちを」

急に扱いが変わり、簡易的な小屋へ案内された。

「ベイカー様！」

すると、知った顔が慌てた様子でやってきた。

「無事だったんですね！ よかった」

ロイドは俺達の姿を見てホッとしている。

「みなさんが海の国に向かわれてから、クラーケンで食いつないでいたのですが、そうそうあれって、みなさんから貰ったソースがないと物足りないですね」

なぜか話が脱線していく。俺は話を遮った。

「えっと、それよりも今の状況を教えていただけますか？」

「ああ！ すみません、あの後少しして、王都から部隊が到着しました。ですが言われた通り、ベイカー様達が戻るまで待機してもらっていたところですよ」

「そうですか。では、町長と部隊の責任者にこれをお渡し下さい」

セバスさんが書状を手渡した。まだ王都の部隊が動き出していないとわかり、ホッとする。

「こ、これは……！」

ロイドは印を見て、目を見開いた。

「海の国の国王からの書状です。この度の騒ぎの謝罪と、今後の交流のことが書いてあります」

「これからは陸の国とも接点を作って行きたいと考えているようですよ」

「それは素晴らしいことです！ 今まで頑なに閉鎖的だったのに、どのような心境の変化があったのやら」

色々聞きたそうにするロイドを無視して、俺達は役目を終えたとばかりに立ち上がった。

「では、我々はこれで失礼します」

部屋を出ようとする俺達を、ロイドが出口でふさいだ。

「お待ち下さい！ 町長と部隊長に、会って行って下さい」

ロイドはセバスさんの腕を掴み、必死に懇願している。
やはり面倒くさいことになった。

ロイドは俺達を半ば無理やり、町長の屋敷へと連行した。

「ベイカー様！ セバスさん！」

部屋に入ると町長が立ち上がり、俺達に挨拶する。

室内にはサウス国の部隊の奴らが座っている。

「部隊長と、副隊長クラス二名つて所でしようか」

セバスさんが従者のように俺の背後に立ち、囁いた。俺はわずかに頷く。

「クラウス隊長、こちらがお話したベイカー様です」

町長が俺達を紹介すると、クラウス隊長と呼ばれた男が話しはじめた。

「この度はサウス国の危機に対応いただき、ありがとうございました。それで海の国とは」

「話をついた。書状を預かったから確認してくれ」

ロイドに視線を送ると、クラウス隊長に書状を渡す。

「拝見します」

クラウス隊長が書状を開き、副隊長と思われる二人ものぞき込んで確認する。二人は目を見開き驚いていた。

「こ、これは！ 近いうちに話し合いがしたいと書いてありますよ！」

町長も書状の内容を聞いて驚いていた。

しかし、クラウス隊長だけは冷静な顔をしている。

「サウス国でなく、ウエスト国と、ですな」

副隊長の一人が俺達をキッと睨んだ。

「ベイカー殿、これはどういうことでしょうか？」

「えっ？ 俺に聞かれても」

とぼける俺に、セバスさんが後ろから口を挟んだ。

「私達はウエスト国にも書状を持っていかなければなりません。急ぎますので、これで失礼致します」

セバスさんが頭を下げて出口に向かう。俺も後に続く。

「なぜ一番近いサウス国でなく、ウエスト国と？」

クラウス隊長は納得できないようで俺達を引き止めた。

「それは、きつと食べ物に惹かれたのでしょうね」

セバスさんが微笑んで答えると、クラウス隊長達はポカンと口を開けた。



「はあ……暇だね」

目立たないよう、町から少し離れた森に降り立った私達は、セバスさん達を待つ間、ひと休みしていた。

「たまにはこうやってゆっくりするのもいいだろ？」

近くに座っていたデボットさんはそう言うが、こう暇すぎるのもつまらない。

「そうだけどさあ、じっとしてるのも辛いよ」

シルバに身を預けるように寄りかかっていると、いい考えが浮かんだ！

「あっそうだ！ 落ちついたらやろうと思ってたことあったんだ」

バツと立ち上がると、デボットさんは「いいから大人しくしてくれよ」と頭を抱えた。

そんなデボットさんを無視して、私は神木のククノ様に話しかける。

「これを増やしたいんですけど、どうすればいいですか？」

私はコジローさんの故郷の霧の里で貰った、大豆を取り出した。

「豆？」

ククノ様が私の手の中をのぞき込む。

今あるのはこれだけだ。どうにか沢山増やしたかった。

「ムサシさんが育ててたのを、少し貰ってきたんです」

「種があるなら簡単だよ。ここですぐにできるから、コハクを呼んでおいで」

「コハク？」

「あの子は木と土魔法が得意だろ？」

「あつなるほど！」

私はシルバの上でじゃれているコハクを呼んだ。

【コハクのために作りたい物があるんだ。手伝ってくれる？】

【キャン！】

コハクに土魔法で地面を畑のように耕してもらい、そこに大豆をまいた。

「じゃミツキは魔法で水を撒いて」

ククノ様に従って、全体に行き届くように水を撒く。

「コハクは大豆を成長させるように魔力を流して。いつものように、木魔法を使う感じだよ」

「キャン」

コハクが土に魔力を込めると、ポコン！ と土から芽が出た。

【あっ！ コハク、芽が出たよ！】

「ミツキもできるならやってごらん」

ククノ様が私の手を取り、土に触らせる。

「こうやるんだよ」

ククノ様が手を繋いだまま魔力を込めた。



「こう？」

ククノ様から感じる魔力のようにやってみると、ニヨキニヨキと大豆があつという間に育った。「僕に加護があるから、やっぱりミツキは相性がいいね。もう一度水を撒いて、同じように魔力を込めれば、すぐにでも収穫できるよ」

「じゃ半分は枝豆、半分は大豆にしよう。コハク、もう少し頑張つてね」

【キャン！】

コハクのシツポがピンと立った。

私はコハクが成長させた青々しい枝豆を半分収穫し、残りを大豆になるまで育てることにした。

しかし体を動かしていると、なんか違和感が生じる。

「じゃ、大豆を水に……浸ひたしておこうね」

桶に大豆を入れ、さらに水を入れようとすると、上手く体が動かずにフワフワする。フラツとよろめくと、シルバが心配そうに近づいてきた。

【ミツキ、大丈夫か？】

体を支えるように横に付いてくれたシルバに寄りかかる。そうしないと立っていられなかった。

【シルバ……ちよつとクラツときただけだよ、魔力使いすぎたかな？ そんなに使つてないんだけど】

話してる途中で力が入らなくなり、ペタツと座り込む。

【ミツキ、おい！ なんか、いつもより体温が高くないか？】

シルバが私の頬を舐める。冷たくて気持ちがいい。

【ハハ……シルバ、気持ちいい】

私はそのまま意識が遠くなり、シルバに寄りかかってしまった。



【シンク！】

俺は急いでシンクを呼んだ。

ミツキの様子が変だと思っていたら、気を失ってしまったのだ。慌てた様子の俺に、プルシアとムーも近づいてくる。

【どうしたの？】

俺の頭にのつたシンクが、座り込んでいるミツキに気がつく。

【ミツキ！ どうしたの？】

シンクがいくら問いかけても、ミツキに反応はない。

【ミツキが急に倒れたんだ。シンク、回復魔法をかけてくれ】

【うん！】

シンクはミツキに触れて回復魔法をかけるが……

【あれ？ 良くならないよ、どうしよう】

今度はプルシアがミツキに顔を近づける。

【熱が高い。これは人がかかる病だろう。シンクの回復魔法は怪我には効くが、病には効かない。ミツキの魔法の方が効くはずだ】

【でも、ミツキの魔法は、自分には効かないんだよ】

「その前に魔法を使える状態じゃないだろう」

ククノが心配そうにミツキの頬に触れた。

【デボット達を呼んでこい！ 人には人の治し方があるだろう】

シンクとコハクが、デボット達の元に向かう。

その時、ムーがミツキの頭に飛びのつた。

【おい、どけ！ こんな時にふざけるな！】

怒鳴るが、ムーは動かない。

【いや見る。ミツキが先程より楽そうだ。ムーの体で冷やしてるんだろう】

ミツキの苦しそうな顔が少し和らいでいた。

少ししてシンクとコハクが、デボットを連れてきた。

「なんだ？ どうしたんだよ、服が破れるだろ」

デボットが服を引っ張られて来ると、俺に寄りかかって苦しそうにしているミツキに気がついた。

【ミツキ！】

デボットの大声に、リアルとエヴァも駆け寄ってくる。

「どうしました？」

「ミツキの様子が変なんだ！」

デボットがミツキに触れて、その体温に気がついた。

「熱がある」

「えっ！」

レアルとエヴァも、ミツキのおでこに触れた。

「海の国にいた時も時折クシャミをしていた。風邪かぜを引いたのか？」
するとミツキが寒そうに身震いした。

「シルバ、ミツキを温めないで。ちよつと貸してくれ」

デボットはミツキを抱き上げ、俺からミツキを離そうとした。

「グウウウ！」

思わず唸り声を出してしまう。

「心配なのは俺も同じだ、布で包んで温めてやろう」

デボットが綺麗な布でミツキを優しく包み込んだ。

「ほら、この上からお前の毛皮で温めてやってくれ」

再びミツキを戻してきたので、大切に包み込む。

「エヴァさん、回復魔法は使えないのか？」

「すまん。私は回復魔法はできないんだ」

デボットの問いにエヴァがすまなそうに謝っている。

「シンクは！」

みんながシンクを見るが、泣きそうな顔でフルフルと首を振った。

「となると、セバスさんを待つしかないのか」

ミツキを見ると、今度は、はあはあと肩で息をして苦しそうだ。

「こんな弱ってるミツキははじめて見る」

デボットがミツキの髪を撫でながら呟くと、みんなが不安そうに静まり返った。

「何かあってからじゃ遅い。ミツキを連れて、セバスさんの元に向かおう」

デボットが、レアルとエヴァを見ると、二人とも頷いた。

「そうですね。その方がいいと思います」

「ミツキをサウス国の連中に会わせたくないが、緊急事態だ」

二人の同意を得てデボットは俺を見る。

「よし、ミツキを連れていく。シルバ達は残ってくれって言いたいが……」

俺をはじめ、誰もミツキから離れたくなくて、その場から動かない。

「騒がないでくれよ」

【ミツキのためだ、みんな乗れ】

フルシアは、みんなが乗りやすいように背中を向けた。

【助かる】

俺はミヅキをデボットに渡し、プルシアに飛び乗った。デボットにも乗れと顎で指示を出す。
「乗っていいのか？」

「ガウ」

レアル達にも早く乗れと視線を向ける。

レアル達が乗るのを確認して、プルシアは力強く羽ばたいた。

◆

俺とセバスさんが部屋を出ようとしたところで、青白い顔をした兵士がやってきた。

「クラウス隊長、ちよつとよろしいでしょうか？」

「すみません、失礼します」

クラウスは俺達に声をかけ、外に出ていってしまふ。

さすがに挨拶もなしに帰るのは不味い。退席の機会を失った俺達は、部屋で待ちぼうけをくらう。扉の外では、クラウス隊長と兵士が何やら揉めているようだ。

「何かあったのか？」

少しするとクラウス隊長が慌てた様子で戻ってきた。

「用事ができたので席を外します。すみませんが、もうしばらくお待ちいただけますか？」

「こつちの話はもう終わったんだが」

「我々にはまだ聞きたいことがあるのです」

クラウス隊長は有無を言わさぬ様子ですごんできた。

ここで騒ぎを起こすわけにもいかず、俺達は大人しく椅子に腰を下ろす。

クラウス隊長はホツとした様子で一礼すると、部屋を出ていってしまった。

「一体、なんなんだ！」

「仮にもA級冒険者でしょうが。堂々と座っていないさかい」

セバスさんに注意されるが、落ち着かないには訳がある。

「なんか、嫌な予感がするんだ」

俺の言葉にセバスさんがじつと見つめてきた。

「ベイカーさんの嫌な予感、ですか」

「ああ、久しぶりに感じる」

こんなのはシルバに会った時以来だった。

「ベイカーさんのそれ、外れたことないですよね」

冒険者をしていると、時折こういふ予感がある。大抵は当たる。

「ミヅキに何かあったのかな」

俺は予感が外れているよう、祈ることしかできなかった。



「止まれ！ 止まらないと攻撃するぞ！」

サウス国の兵士が攻撃態勢をとって、プルシアに警告する。

「攻撃しないでくれ！」

デボットが片手を振って上から叫ぶが、声が届いてないようだ。俺はデボットの服に噛み付くと、背中に乗せた。そしてプルシアの背から飛び降り、兵士達の前に着地する。

「グルルル！」

「ぎゃー！」

「な、なんだ！ 今度はなんだ！」

サウス国の兵士達は俺の姿を見て、さらに警戒してしまった。

デボットがすかさず口を開く。

「わ、私達はこの町にいる仲間用があるだけです！ 町長の屋敷にいる、セバスさんとベイカーさんを呼んで下さい！」

デボットはよろめきながら俺から降りた。

「セバスとベイカーって、あの冒険者のことか？」

二人の名前に聞き覚えがあるようで、数人の兵士が反応した。

「そ、そうです。彼らと話をさせてくれ」

「グルルル」

【早くしないか！】

どうすべきか迷っている兵士にイライラして唸り声をあげる。

こうしている間にも、ミツキの体はどんどん熱くなっていた。

「確認する！ それまでそこから動くな！ 近づけば攻撃する！」

「わ、わかったから早くしてくれ！ 病人がいるんだ！」

プルシアも、俺達の後ろにゆっくりと降り立った。

【シルバ、無理しないでよ！ ミツキがいるんだから】

シンクがデボットの肩から、俺が飛び降りたことを注意してくる。

「ま、また増えた」

兵士達が俺達の姿に後ずさった。

びびるくらいなら早くあいつらを呼んでこい！

話ができないことでイライラが募る。

「とりあえず手が空いている兵士達を連れてこい。そしてクラウド隊長に報告だ！」

「今呼んでいます！」

兵士は人を集めるため、急いで駆け出した。

しばらくして、話のできそうな男がやってきた。

「クラウド隊長が到着致しました！」

兵士達は、クラウド隊長と呼ばれた男の姿を見てホツとしている。

「私はサウス国の部隊長のクラウドだ。君達は？」

クラウド隊長は剣に手をかけ、声には警戒をにじませている。

「私達は先程、この町に来たベイカーさん達の仲間です。私達の連れに病人が出ました、至急セバスさんをお呼びください！ もしくは私達を町に入らせてくれ！」

「町に入ることは容認できない。あなた方の戦力に脅威を感じている」

クラウド隊長は、俺やプルシア達を見て冷や汗をかいていた。

「病人だけなら預かる。私達の医師に見せることはできる」

「なら私も行く！」

デボットがミヅキを抱きしめ、話しにならないと睨みつけた。

【俺も行く！】

吠えて近づこうとすると、剣を抜かれた。

「その従魔は入ることは許さない。入れば、病人の治療はしないぞ」

【ふざけるなよ！ デボット、もういい！ セバスの所に行くぞ！】

デボットを見るが、俺の言葉は通じなかった。

「シルバ、大人しくしてくれ。とりあえずミヅキを診せるのが先だろ？」

【ぐうう！ こんな奴ら蹴散らしてさっさとセバスの所に行けばいいじゃないか！】

俺の不満そうな様子にデボットが勘違いをする。

「ミヅキと離れたくないのはわかるが、待っててくれよ」

【くっそ！ まともに通じやしない！】

【シルバ待ってよう。ミヅキが帰って来なかったら、その時は好きなようにしようよ】
シンクを見ると、怒りを抑えるように赤く燃えている。

ここで駄々を捏ねてもミヅキの治療が遅くなるだけだ。不満だが、腰を落とした。

「納得してくれたか？」

デボットが俺を見るが、ふいつと横を向く。

納得はしていないが、仕方ない。

「では、あなたと病人だけついてきてくれ」

クラウド隊長が背を向けて歩き出す。

「じゃあ行ってくる。レアル、後は頼むぞ」

「デボットさん、ミヅキをお願いします」

デボットは頷くと、ミヅキを抱いて足早にクラウド隊長の後を追った。



クラウド隊長の後を歩いていると、一軒の家についた。クラウド隊長は扉を開け、奥に向かって声をかけた。

「クラーク先生いますか？」

「なんだ」

奥から声と共に、白衣を着た男性が出てきた。身なりからして医者とわかる。

「病人です、診てくれますか？」

クラーク先生と呼ばれた男は、俺の腕の中にいるミツキを見たあと、ベッドを指さした。

「そこに寝かせなさい」

俺はミツキに負担がないよう、そっとおろした。

「急に熱が出て……」

俺がミツキが倒れた時のことを説明すると、クラーク先生がミツキのおでこに手をのせた。

「結構、熱いなあ」

そのまま回復魔法をかけるが、クラーク先生は眉間に皺を寄せた。

「回復魔法が効かない」

クラーク先生はミツキを見ながら思索顔をしている。

「これはもしかして、王都で流行はつてる病ですか？」

クラウス隊長が口を挟んだ。

「その可能性が高いなあ」

クラーク先生が困った顔をして、ミツキに布団をかけた。

「ここでは調べようがない。王都に行けばハッキリするが」

「どういうことですか？ 流行り病とは？ ミツキは治らないのか！」

俺はクラーク先生に噛みついた。

「今、サウス国で、子供だけがかかる風邪のような症状の病が流行ってるんだ」

「子供、風邪？」

「何故か大人はかからず、子供にしか症状が出ない。高熱が出て、回復魔法が効かないんだ。そのせいで王都は今大変なことになっている。だからここに来るのも遅れてしまったんだ」

「先生！」

クラウス隊長が言い過ぎだと止めようとする。

「それに、ミツキもかかったと？」

俺はクラウス隊長を無視して質問する。そっちの国の事情など知ったこっちゃない。

「その可能性が高い」

クラーク先生が頷いた。

「ち、治療法は？」

「今、王都でもその原因と治療法を探している最中なんだ。まだハッキリとした原因はわかっていない。熱は三、四日で引く。しかし、その後すぐに違う病気になったり、周りの子にうつることがわかっている」

「じゃあミツキも熱は下がるんだな！」

「その後、きちんと治るかは保証できない」

「なんだよそれ！」

「とりあえず熱を下げる薬を飲ませるが、あまり効果は期待しないでくれ」

「薬……あつ エヴァさん！」

薬と聞いてエヴァさんを思い出した。彼女も薬を作れると言っていた。

「ありがとう、薬は大丈夫だ」

俺はミツキを布団でくるんで抱きかかえると出口へと向かった。

「世話になった！」

「「えっ？」」

俺は二人の返事も待たず、来た道を駆け足で戻る。

町の入り口の門の前では、みんなが落ち着きない様子で待っていた。

その中にエヴァさんの姿を見つめる。

「エヴァさん！」

【「どうだった！」】

「どうした！」

みんなが駆け寄ってくるので、素早く事情を説明する。

「子供だけに流行る病？」

エヴァさんは少し考え、思い当たる節ふしがあるのか顔を上げる。

「昔に流行ったやつかなあ、でもあれの治療薬は確か、貴重な薬草がないと作れないんだ」

「どんな薬草ですか!？」

「高山の岩場に生えてる千龍草せんりゅうそうだよ」

「聞いたことがないな」

俺がレアルを見ると、彼もわからないと首を振る。

「これかな？」

すると一緒にいたククノ様が、何処から取り出したのか一枚の葉っぱをエヴァさんに差し出す。

「こ、これです！ そうかククノ様ならどんな植物でも……しかし力をお借りして大丈夫ですか？」

魔力の心配をしているようだ。

「ミツキが良くなるなら構わないよ」

「すみません！ 後で私の魔力を差し上げます」

「いいから、早く薬を作ってあげてくれ」

ククノ様が微笑んだ。

「ちよつと家に行つて来る！」

エヴァさんは門番に頼み込み、一人町に入つて行った。

女性一人という事もあり、あっさりと町の中に入れてもらえた。

エヴァさんと入れ違いで、クラウド隊長とクラーク先生が、俺の後を追いかけてきたのか、町から出てきた。

「今すれ違った女性は？」

「彼女は薬師で、今この子のための薬を作りに行きました」

「治せるのか！ この病気を！」

クラーク先生が興奮するが、確かなことは言えない。

「それはわかりませんが」

話さない方がいいと、レアルがアイコンタクトを送ってくる。

そんな俺達の様子に、今度は向こうが頼み込んできた。

「この病気の治療法を教えてください！ この病で苦しんでる子が王都には沢山いるんです！」

クラーク先生が必死に頭を下げてきた。

ミヅキを診てもらった恩もあるが、これ以上巻き込まれる訳にはいかない。

「なら、セバスさんとベイカーさんに会わせて下さい。でないと、これ以上はお話しできません」

クラウス隊長の表情が曇り、態度が変わった。

「……いや、彼らはきつと協力しないだろう。こちらも手段を選んではいられない」

「どうする気だ！」

「申し訳ありませんが、あなた達を捕まえて王都に連れて帰ります」

「はっ？ こんな理由で、他国の人を捕まえていいと思ってるのか？」

まさかそんな強硬手段に出ると思わず、ミヅキを守るように抱きしめて後ずさる。

「この病気を治すことができるかもしれない薬師と、その病気を患^{わづ}っている子です。これ以上被害

が広がる前に『隔離』させていただきます」

クラウス隊長が申し訳なさそうに剣を抜いた。

「そちらも必死なのはわかりますが、横暴ではありませんか？ このままでは国同士の揉め事になりますよ」

レアルが暗に戦争になりかねないとのめかした。

「我々には時間がないんだ。今この病のせいで……すまない、これ以上は言えない。その代わりに、その薬の作り方と効能がわかれば、すぐにでも解放する。国から報奨金も出るだろう」

「そんなもん、要らねえよ」

俺達もシルバ達も、サウス国の対応に怒りを覚える。

俺達は、ミヅキだけでもどうにか逃がせないかと必死に考えていた。

「もういい。俺達は先に隠れ里に帰ろう。セバスさん達はそのうちに勝手に来るだろう」

俺が囁くと、レアルも頷いた。

「そうしましょう。我々がサウス国にそこまでの義理などありませんからね」

俺達はクルツと向きを変えるが、サウス国の兵士達が回り込んできた。

「すみませんが、行かせるわけにはいかない」

「町に入った女性も拘束させていただきます」

俺達は剣を構える奴らを睨みつけた。

自分というより、腕の中にあるミヅキにも剣が向けられていると思うと腹が立つ。

「勝てると思ってるのか？」

「思わず言葉も汚くなり、クラウス隊長を睨みつけた。」

「無傷ではすまないだろうが、病人をかばって何処まで抵抗できますか？ どうやら余程大事な人だと思われませんが、こちらも譲れない事情がありますので」

クラウス隊長の目が真剣なものに変わる。

「グルウウ……」

「キシヤー！」

シルバとコハクが、ミヅキを抱く俺の前に出てきた。

「戦争でもする気ですか？」

「それはそちらでしよう？ ただ一人の病人のためにそこまで抵抗する意味がわかりません。協力しあえばお互い利益になるでしょうに」

「俺達には利益と感しない」

言葉を交わすほど、両者の間にピリピリと火花が散った。

「だ、めだよ……」

ミヅキがボソツとつぶやいて、俺の腕に熱い手をのせた。

「ミヅキー」

【【ミヅキー（キャン）】】

ミヅキの声に殺気を放っていたシルバ達が、一気に警戒を解いて集まってきた。

「シルバも……デボットさんも……怖い、よ。喧嘩……しないでえ……なか……よくねえ」

ミヅキが震えながら俺の顔に手を伸ばす。熱い手が俺の頬に触れた。

「泣かないで……デボットさん、私……は大丈夫だよ」

自分の方が辛そうなのに、こっちの心配をするミヅキにも腹が立つ。だが、それ以上に心配だった。

【シルバ達も、みんなの言うこと、聞いてね】

ミヅキは苦しそうな顔でシルバに精一杯笑いかける。

「ミヅキー」

そこに、エヴァさんが走ってきた。手には薬を持っている。

「待て！」

兵士が止めようとすると、エヴァさんがムツとした顔で兵士を睨み、手のひらを前に出した。

「うるさい！ 邪魔だよ」

エヴァさんが魔法で兵士の動きを止め、そのままミヅキの元に来る。

「ミヅキ、これを飲んでみて」

エヴァさんがミヅキに緑色の液体を飲ませようとする。

「エヴァさん、その色大丈夫ですか」

「大丈夫だと思う。久しぶりに作っただし、急いだからちよっと自信はないが」

飲みやすいようにミヅキの上半身を起こしてやった。

「ミヅキ飲めるか？」

「う……ん」

目を微かに開きながら力なく頷く。

ミヅキの口元に薬が入った容器を付けると、コクツと一口飲み込む。みんなで様子を見守るが、ミヅキに目に見えた変化はなかった。

「すぐに効く訳じゃないのか？」

おでこを触ってみるが、まだかなり熱がある。

「完治には飲み続けたいといけないが、熱はすぐに下がってくるはずだ」

エヴァは、何か違うのかと薬を見つめていた。

「何か足りない物があるのでは？ 我が王都に帰れば、施設も材料も思い通りに用意致します。ですから、このままみなさんで来て下さいませんか？」

事の成り行きを見ていたクラウス隊長が、もう一度お願いしてきた。

「エヴァ……貸してくれ」

ミヅキが朦朧としながら、エヴァさんに手を伸ばす。

しかし視点も合わず、様子もいつもと違って見えた。

「ミヅキ？」

エヴァさんは泣きそうな顔をしていた。

薬をミヅキに渡そうとするが、手が震えている。

「エヴァは慌てるこそそっかしいよね。そんな所が可愛いけど」

エヴァさんを口説くようなセリフを吐くミヅキに、みんなが哑然とする。

ミヅキはそのまま薬を掴んでいるエヴァさんの手を上から包み込んだ。すると薬が淡く光った。

「なんだ、今のは！」

クラウス隊長が驚き、エヴァさんとミヅキを見つめている。

「ユ、ユウイチロウ？」

ミヅキはエヴァさんにニコツと笑ったかと思うと、ガクツと意識を失ってしまった。

「ミヅキ！」

落ちそうになったミヅキをしつかりと受け止める。

「なんだ、今のは？」

「もう一度薬を飲ませて！」

みんなが困惑するなか、エヴァさんが薬をもう一度ミヅキの口元に近づけた。

再度ミヅキに薬を飲ませると、みるみるうちに顔色が良くなってきた。

おでこに手を当てると、まだ少し熱を帯びているが、先程の熱さはなかった。

「熱が下がってきてます」

ホツとするど、シルバがミヅキの顔をのぞき込んで顔を何度も舐めている。

【よかった、苦しくなさそうだ】

「まだ安心できない。完全に治るまでしばらく薬を飲ませ続けないと」
エヴァさんが少なくなつた薬を見つめて険しい顔をする。

「その薬、もう一度作って下さいませんか？」

一部始終を見ていたクラウス隊長が、真剣な顔でエヴァさんを見つめる。

そんなクラウス隊長の態度に、エヴァさんは我慢できずに睨みつけた。

「さつきから、なんなんだお前らは」

俺達はエヴァさんに説明してやる。

「こいつら、その薬が必要なんだそうですよ。俺達を拘束して、王都に連れ帰るつもりなんだ」

「はあ？」

エヴァさんはあまりの身勝手さに呆れている。

「せめて作り方を教えて下さい！」

「教えるのは構わないが、お前さん達に作れるとは思えないけどねえ」

エヴァさんはそう吹き、持っていた薬をクラウス隊長に投げつけた。

「それをやる。自分達で解析かいせきなりして、薬を完成させな」

エヴァさんは興味を失つたように背を向けた。

「これは一度目に飲ませた薬ですよね？ あの子供が、何かしたはずですが？」

クラウス隊長は、エヴァさんが持つもう一つの薬に視線を向けた。

「やっぱり見ていたか」

俺達はサツと目を合わすとミツキを隠した。

「なんの事だ。その薬を作ったのは間違いなく私だよ」

仕方なくエヴァさんがクラウス隊長の前に出た。

「いえ、しっかり見ました。一度効かなかつた薬に、その子供が何かしましたよね？」

クラウス隊長は隠されたミツキを指さした。

「その子供がいないと、薬は完成しないんじゃないんですか？」

「いや、そんなことはない……が、しょうがない。私が王都に行こう。そこで薬を作つてやるよ。」

その代わり、この子供はもう帰してやつてくれ。病人に無理をさせないでほしい」

クラウス隊長はじつとエヴァさんを見つめて黙っている。どうすべきか考えているようだった。

「薬は作れるんですよね？」

「ああ、今回は時間がなかったから不完全だったが、ちゃんと時間を貰えれば作れる」

「時間……ですか？」

悩むクラウス隊長に、後ろで成り行きを見守っていたクラーク先生が声をかけた。

「いいんじゃないか？ 彼女が来てくれるなら、設備もあるし薬はできそうだ」

「そんな！ 先程のことは見ても、その子供には何か秘密がありそうですよ！」

「うちの子も病気なんだ！ その子供も連れて行こう！」

兵士の一人が声を上げると、黙っていた他の兵士も騒ぎだす。

「彼らを帰さないなら、私は薬を作る気はない！」

エヴァさんがこれ以上は譲れないとキツパリと言いつつた。
それが決め手となり、クラウス隊長が折れた。

「わかりました。ではエヴァさんと言いましたね、このまま王都までご同行お願い致します。あなたを客人として丁寧に迎えします。どうかサウス国のために薬を作ってください」

クラウス隊長と先生と一緒に深く頭を下げた。

二人の紳士的な態度にエヴァさんも諦めたように肩の力を抜く。

「わかったよ。すまないね、デボットさん達。私はここでみんなとはお別れとするよ」

エヴァさんが振り返り、俺達に笑いかけた。

「ミツキが起きた時、寂しがりますよ」

「あいつらの必死な様子を見るに、サウス国は異常事態なんだろう。このままだと、ミツキまで連れ去られかねない。そんなことになったら国同士で戦争になるぞ」

エヴァさんが冗談っぽく笑うが、本当にそうなりかねない。

エヴァさんは、みんなと最後の別れをしたいと、クラウス隊長達に少し離れてもらった。

エヴァさんは悲しそうな顔をして、俺の首に腕を回し、抱きしめてきた。

戸惑っていると、エヴァさんが耳元で囁く。

「この薬がなくなるまで、ミツキに飲ませてくれ。いいか、熱が下がっても全部飲ませるんだぞ」
残りの薬を全部、俺のポケットにこっそりと忍ばせた。

「はー」

「薬を仕上げるにはミツキの力が必要だ。多分無意識に錬金術錬金術を使っただろう、ミツキに意識があつたとは思えないから、デボットさんが教えてやってくれ」

俺はわかつたと頷いた。

「じゃあね」

エヴァさんがそのまま視線を落として、俺の腕にいるミツキの頭を愛おしそうに撫でる。

「う、ううん」

ミツキがモゾモゾと動くと、エヴァさんの服を掴んで丸まってしまった。

「ミツキ」

エヴァさんが寂しそうに笑うと、そつと自分の服を脱ぎ出す。

「エ、エヴァさん？」

エヴァさんが目の前で下着姿になると脱いだ服をミツキにかけた。

「起こしたら可哀想だからね、じゃあ」

エヴァさんはそつとミツキの頬に触れ、おでこにキスをする。そして堂々とクラウス隊長の元へと向かった。

下着姿で近づくとエヴァさんに、先生は白衣を脱いで羽織らせる。

「ありがとう」

エヴァさんは白衣を着てお礼を言った。

「ではこちらへ、用意でき次第、王都に向かいます」

「わかった」

クラウス隊長はエヴァさんを丁重に馬車へと誘導する。

「君達も、色々とすまなかった。その子が早く治ることを願っている。では、我々は失礼する」
クラウス隊長は俺達に頭を下げると、町へと帰って行った。

「エヴァさん」

エヴァさんが連れて行かれてしまった。俺達は何もできずに立ちすくんだ。

「ミツキが起きたら、なんて言いますかね」

レアルが想像したのか、ため息をつく。

「ミツキが悲しむな」

ミツキはスースーと規則正しく寝息を立てている。しばらくは寝ていてくれることを、俺達は願った。



【エヴァがいなくなったら、ミツキ泣くんじゃないか？】

ミツキが悲しむのは見たくない。俺がシンクを見ると、同じように心配している。

【そうだね、シルバ。しかも自分のせいだなんて言い出しそっだよ】

【くーん】

エヴァを思い、コハクも悲しそうな声を出す。

【でもここで下手に手を出すと、エヴァのしたことが無駄になりませんか？】

プルシアがみんなを見下ろす。

【デポット達が上手く言うだろう。俺達もそれに合わせておこう】

【そうだね】

デポット達も同じように頭を悩ませていた。

【どうしますか？ 正直に話したらミツキは自分を責めますよ】

「ミツキが寝てる間にセバスさん達が帰って来てくれるといいんだが」

町から少し離れた所で待っているが、二人が帰ってくる気配はない。

「そろそろ戻って来るんじゃないでしょうか？ 海の国の侵略の心配がなくなった今、ここにいる理由もありますし」

「だいたいけど」

どうも嫌な予感がするのかわ、デポットはソワソワとしていた。

「こちら辺で待つか、俺達だけでも里に戻るか？」

「一度、森に戻りましょう。そこでベイカーさん達を待った方が良さそうです」
みんなは頷き、最初に降り立った森へと向かった。

森に着くと、ククノが木の小屋を建ててくれ、中に小さなベッドを作った。

「ミツキを寝かせてあげて」

ベッドにふわふわの綿を敷き詰め、布をかける。

「ありがとうございます」

デボットはそっとミツキをベッドに下ろした。

「ベイカーさんとセバスさんが戻るまで、大人しく寝てるんだぞ」

頭を軽く撫でると小屋を出て行き、扉を閉めた。

「エヴァが残した薬、ミツキなら多分作れるよ。いざと言う時のために、材料集めしとくかい？」
ククノが聞いてくる。

「そうですね。ミツキに必ず飲ませるように言ってみましたし、多に越したことはないですよね」

「確か、高山に生えてる薬草だと言っていたよな」

「見ればわかるよ。本当は生やしてあげたいけど、これ以上魔力を減らすことはできなくてね」

ククノがすまなそうにする。

「いえ！ エヴァさんがいなくなつて、ククノ様まで魔力使っていたらと考えると、その方が怖いですからね」

「人が行くのが難しい所だからプルシアとシンク手伝ってもらえるかな？」

ククノがプルシアとシンクに声をかけた。

二人は顔を見合わせて頷く。

【ミツキのためになるなら】

【手伝おう】

「ありがとう、よろしくね」

ククノはプルシアに飛び乗ると、西の方を指さした。

「向こうに高い山があるから、そこを目指してくれる？」

プルシアが飛び立つと、シンクが後ろから続いた。

「じゃ、ちよつと行つてくるね」

ククノが軽く手を振る。

「よろしくお願いします」

デボット達が頭を下げ、ククノ達を見送った。

「よし。俺達は飯でも作っておくか。いつもミツキに任せっぱなしだったからな」

「材料がありませんね。ちよつと調達に行きましようか？」

「そうだな、じゃ俺が行つてこよう。レアルは火をおこしておいてくれ」

【俺も行こう。ミツキが起きた時に美味しいもんを食わしてやりたい】

デボットが食材を探しに行くと、俺も後をついて行く。

「ん、シルバも来るのか？ じゃあミツキに精がつく美味しいもんを探そう」

「ガウッ！」

デボットと俺は、近くの森の中に食料を探しにいった。

「コハクはミツキの所に行つて下さい。そのもふもふの毛でミツキを温めてあげてほしい」

レアルがコハクを撫でると「キャン！」と鳴き小屋に向かった。
コハクがそばにいれば、護衛になるだろう。

火を起こすための焚き木を拾い、私レアルは小屋に戻ってきた。焚き火を燃やし、湯を沸かして
みんなが戻るのを待っていたのだが……

ふと小屋を見ると、扉が開いている。嫌な予感に、小屋に向かって走る。

「ミツキ！」

勢いよく小屋に入ると、そこには寝ていたはずのミツキとコハクの姿が消えていた。

「ミツキ……」

何もない部屋を愕然と見つめる。

「どういことだ」

外に飛び出し、腹に力を入れ力の限り叫ぶ。

「デポットー!! シルバーー!!」



【ん？】

俺は微かに聞こえた声に、耳をピクつと動かし集中する。

【今の声、レアルか？】

声に必死な様子を感じ、ミツキがいる小屋の方を見つめる。

【デポット、嫌な予感がする！ 帰るぞ】

「ガウ！」

声が聞こえていないデポットは、黙々と食べられそうな野草を摘んでいた。俺は服を噛むとヒョ
イッと背に乗せる。

「うわっなんだ！」

驚くデポットに構わずに駆け出した。

「どうした？」

デポットは俺を怪訝そうに見てくる。

「何か、あったのか？ シルバが動くということは、ミツキに何かあったのか？」

デポットはギョッと俺の体にしがみついた。

「俺に構わず全力で行ってくれ！」

グンと加速すると、あっという間に小屋にたどり着いた。

レアルが俺達に気が付き、駆け寄ってくる。

その顔を見るといい知らせではないことがわかった。

「大変です、ミヅキが居なくなりました！」

「どういうことだ!？」

【なんだと！】

急いで小屋を見に行くと、ミヅキが寝ていたはずのベッドがもぬけの殻になっていた。

俺はベッドの匂いを嗅ぐ。そこには微かにミヅキの匂いが残っていた。

「私が焚き木を拾ってる間に、コハクも一緒に寝ていたんですが、いません」
リアルはガツクリとうなだれ「すみません」と微かな声で謝った。

「ミヅキが自分で出ていった訳じゃないよな」

「その可能性は低いかと」

【それなら俺が気がついたはずだ！】

俺の様子に、二人ともそれはないと判断したようだ。

【誰だろうと、許さん！】

俺は毛を逆立て、外へ出た。

ミヅキの匂いは小屋の外に感じない。

「グウオオオオオー!!」

雄叫びを上げる。

「もしかしてサウス国の連中が？ ミヅキを連れていきたがっていた」
デボットの言葉に、あのムカつく奴らの顔が浮かんできた。

「あの隊長は、約束を破る奴には見えなかったが……」

俺は町に向かって走り出した。

「シルバ！ もしや町に向かったのか？」

「シルバを止めないと死人が出るぞ。そうなったら本当に戦争の引き金になっちゃう」

「しかし、我々では追いつけません」

「クソッ！ プルシア達を待つしかないのか」

デボット達の声を振り切り、俺はミヅキを求めて走り出した。

二 兵士

「では、エヴァさんはこちらでお待ち下さい」

エヴァという薬師のエルフは無言で頷き、大人しく馬車に乗り込んだ。

憂いを含んだ表情で外を眺めている。

その様子を見て、俺リゲルは不安になり、クラウス隊長に尋ねた。

「クラウス隊長、あの薬師だけで本当に大丈夫でしょうか？」

クラウス隊長は、エルフが乗る馬車を見つめて少し沈黙してから頷いた。

「薬師としてはかなり腕がたちそうです。魔力も高そうですから、国の充実した施設なら、きつと

薬ができますよ。いえ、必ず作ってもらいます」

クラウド隊長がクラウド先生を見ると、先生も同じように頷いた。

「そうだな、協力してついてきてくれたんだ。彼女を信じよう」

しかし他の兵士達は不満そうに馬車を見つめた。

「お前、どう思う？」

着々と国に帰る準備をしながら、兵士の一人ジャンが俺に小声で話しかけてきた。

「あの子供がいれば確実に薬ができるんじゃないか？」

俺も周りを気にしながら頷く。

「やっぱりそう思うか？」

「どう見たって、あの子が薬に何かしたよな」

「ああ、俺も見た」

ジャンは手を止め、持っていた道具を地面に下ろした。

「お前は下の子が病に侵されたんだったな？」

俺は、息子の顔を思い浮かべながら頷いた。

「お前だって、妹の子供が病にかかったんだろ？」

ジャンも姪っ子の顔を思い出したのか、辛そうな顔で頷いた。

「ああ、まだ三つだぞ。もっと色んなことをさせてやりたかった」

この病は年齢が低いほど、死亡率が上がる。

姪っ子は、もう助からないかもしれないと医者に言われているらしい。

「これ以上熟が上がれば、助かったとしても何かしら障害が残るって言われたんだ」

俺達は、決意したように顔を見合わせた。

「罰せられる覚悟はあるか？」

ジャンの言葉に、俺はコクリと頷く。俺達は最低限の荷物を持ち、麻袋を掴むと気づかれぬ様にそっと隊列を離れた。

俺達は飛竜に乗って、ドラゴンが降り立った森へ向かった。

あの子供を連れた奴らが、この森の方に行ったのだけはわかっていた。

「気付かれないように低く飛ぶんだ」

森の近くまで来ると、飛竜から降りる。遠くでドラゴンが飛び立って行くのが目に入り、慌てて身を隠した。

「ドラゴンがいるってことは、あの近くだ」

ジャンと俺は気配遮断をして、足音を立てないように素早く森の中へ入った。

森に入ってしまったらしくすると真新しい小屋が目に入った。周りを確認しても、人の気配はない。

ジャンがそっと扉を開けると、そこには目当ての人物が寝ていた。

「いた！」

俺達が少し近づいただけで、子供のそばにいる従魔が立ち上がり、毛を逆立てた。